

日常的世界の形而上学：人工物種に関する適切な理論の構築に向けて

倉田，剛
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1685850>

出版情報：哲学論文集. 52, pp.1-28, 2016-09-24. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

日常的世界の形而上学

——人工物種に関する適切な理論の構築に向けて

倉田 剛

0 序

われわれの日々の生活の中で最初に立ち現れてくるような世界、これを「日常的世界」と呼ぶことにしよう。日常的世界は、たんにふだんの語りや思考の対象となるだけでなく、そのうちで様々な行為が営まれる場でもある。われわれはそうした世界のうちに見いだされる諸事物と相互に作用しあっているように見える。言い換えればそれは、われわれに変化をもたらす場であると同時に、われわれの側が変化をもたらし場でもある。

よく知られているように現象学の伝統は、いち早く日常的世界の構造に関心を向け、その哲学的分析に着手した。初期ハイデガーによる「世界内存在」、後期フッサールによる「生活世界」、およびメルロ＝ポンティによる「生きられた世界」の分析は、しばしばその典型例として挙げられる。これに対し、分析哲学の伝統は、日常言語学派といった例外を除けば、われわれの言う「日常的世界」にかなり冷淡であったと言える。セラーズによる「科学的世界像」(scientific image of the

world)と「日常的世界像」(the manifest image of the world)との対比を用いれば、今日でも大多数の分析哲学者たちは前者の科学的世界像こそが哲学的分析の対象だと考える傾向にある。また近年の「自然主義」の流行はこうした傾向にさらに拍車を掛けているように見える。

むしろこの傾向は分析哲学の「一部門」である分析形而上学(analytic metaphysics)の分野においても顕著である。このことは、アームストロングが、現代普遍論争の端緒と目される著作に「普遍者と科学の実在論」というタイトルを与えたことや、ロウが現代形而上学の到達点の一つである『4カテゴリー存在論』に「自然科学の形而上学的基礎」という副題を添えたことから窺い知ることができる⁽¹⁾。

著者の目下の課題は、こうした傾向に抗しながらも、現象学ではなく、むしろ分析形而上学という枠組みの中で、日常的世界の構造を十全に記述することにある⁽²⁾。本稿はこの大きな課題への取り組みの一つであると理解されたい。本稿を動機づける問いはおおよそ次のように表明される。日常的世界の中でもっとも頻繁に出会われる対象、すなわち人工物(artifacts)の実在性はどうのように擁護されるのか。またそれはいかなる本性をもつのか。こうした問いに答えるためには、個々の人工物が属する人工物種(artifact kinds)についての適切な理論を構築する必要がある。本稿のねらいはそうした理論構築への一つの足掛かりをつかむことにある。

われわれは第1節で、なぜ多くの哲学者たちが人工物種の実在性について懐疑的な態度を示してきたのかを検討する。ここでは「確定性」と「心からの独立性」を種の実在性の基準と見なす自然種の標準的理論およびその理論に基礎を与えたとされるロックの見解が考察の対象となる。第2節では、生物種を標準的理論の適用範囲の外におく現代の生物学者たちの見解(「個体説」)を考察する。第3節では、個体説と同様の問題から出発しながらも、生物種をモデルとして自然種の理論を再構築しようとするHPC説が議論の俎上にのせられる。第4節では、人工物種理論へのHPC説の適用を目指す二つの立場、すなわち「起源論的機能説」と「認識実践説」を検討する。われわれは、これら二つの立場がともに自然種と人工物種

を統合的に説明しようとする一方で、自然種に関する根本的な見解の相違を含むことを指摘したい。第5節において、われわれは、第4節で論じた二つの立場がいくつかの困難を抱えており、ゆえに「人工物種に関する適切な理論」たりえていないことを示すつもりである。最後の第6節では、われわれが支持する「志向説」を導入し、起源論的機能説とのハイブリッド理論の可能性を模索する。

1 人工物種の実在性への懐疑

ごく自然なことではあるが、人工物種を論じる際に、自然種 (natural kinds) についての理論を参照することは避けがたい。なぜなら、自然種についての哲学的考察の歴史は、人工物種に関するそれよりも古く、すでに相当の理論的蓄積を有するからである。実際、人工物種についての探求は始まったばかりであり、われわれは現時点で有力な理論を手に行っているわけではない。

ところがここで厄介な問題が生じる。標準的な自然種の理論をそのまま受け入れるとすれば、「人工物種は実在的な種ではない」という結論が導き出されてしまうからだ。この結論が正しいとすると、日常的世界で見いだされるような椅子や時計やパスポートといった人工物は存在しないことになる。⁽³⁾ 以下では、なぜこうした結論が導き出されるのかを見ていくことにしよう。

標準的な自然種の理論によれば、種が実在的であることの基準は、その確定性 (determinateness) と心からの独立性 (mind-independence) に求められる。前者の基準は、ある対象が特定の種に属するか否かが、その内在的特徴によって完全に確定することを指す。たとえば金という種はこの基準を満たすと考えられる。なぜならある金属のサンプルが金という種に属するか否かは、もっぱらそれがもつ原子構造によって決まるからである。水という種に関しても同様である。実際に、ある液体

のサンプルが水という種に属するか否かは、それがもつ分子構造によって確定する。われわれが「自然種」と呼ぶ種は、確定性の基準を満たすがゆえに実在的であると考えられる。

後者の基準は、ある対象が特定の種に属するか否かが、われわれの思考や言語から独立していること、つまりわれわれの認識実践や言語実践に依存しないことを指す。いま例に挙げた自然種はこの基準を満たすだろう。なぜなら、ある金属のサンプルは、われわれがそれをどう考えようが、どのような名前前で呼ぼうが、それらとは無関係に、ある特定の種に属するかである。ある液体のサンプルについても同様のことが言えよう。

ところが多くの人工物種はこれら二つの基準を満たさないと考えられる。ある木片の寄せ集めが「椅子」という種に属するか否かは、その内在的特徴によって確定するものではなく、またある金属の寄せ集めが「時計」という種に属するか否かも、その内在的特徴によって確定するものではない。椅子は、金属から成っていても、プラスチックから成っていても構わず、サイズや形状に関しても多くのヴァリエーションがある。したがって椅子を椅子たらしめている内在的性質が存在するようには見えない。同様に、時計を時計たらしめている内在的性質を特定することも困難である。時計は、様々な素材で製作されるだけでなく、様々な形態をもちうる。また内部構造に関しても、ぜんまい式や電池式など多くのヴァリエーションがある。こうした事情から、人工物についてのシユウォーツの指摘は十分に説得力をもつように見える。

「人工物は隠れた本性（ロックの言う「実在的本質」）をもたず、あるものを鉛筆にしているものは、何らかの形態や機能といった表層的な諸特徴にすぎない」。

われわれ例で言うならば、椅子を椅子たらしめているもの、時計を時計たらしめているものは、（それらの大雑把な形態を除くと）せいぜい腰掛ける人を支える、あるいはものを切断するという機能（function）だということになる。人工物種を規

定するにあたって、機能が重要な役割を果たすことは後ほど触れることにするが、通常はシユウオーツの言葉が示唆するように、機能は対象の「実在的本質」(real essence)に含まれない。なぜならそれは対象に内在的であるとは見なされないからだ。このように人工物種は「確定性」の基準を満たすとは言えず、これより「人工物種は実在的な種ではない」という帰結が導かれる。この帰結が正しければ、椅子も時計も存在しないことになる。

さらに人工物種の「心への依存」は否定しがたい。というのも、椅子や時計は、それらを何らかの目的で用いることを意図した制作者なしには存在しえなかったというだけでなく、それらを使用する知的存在者から独立して当該の種に属するとは考えにくいからである。このことは次のような人工物を思い浮かべれば明らかであろう。たとえば、私の財布の中にある紙片が「千円札」あるいは「貨幣」という種に属すること、それを千円札あるいは貨幣として扱うわれわれの態度(信念)とは無関係ではありえない。ゆえに人工物種は「心からの独立性」という基準を満たしておらず、実在的ではないとされるのである。

人工物種を実在的な種のリストから排除する標準的な自然種理論は、シユウオーツの引用でも言及されたように、ロックによる**実在的本質**と**名目的本質**(nominal essence)との区別にその起源をもつ。ロックは、われわれが各々の種の名前に結びつけた抽象観念を「名目的本質」と呼んだ。それは各々の種を他の種から区別させる「尺度・限界」でもある。これに対し、**実在的本質**とは「この名目的本質ならびにその種の全特性がもとづく実体の**実在の構造**(real Constitution of Substance)」であると言われる⁵⁾。

「例を挙げると、金の名目的本質は金という言葉の表す複雑観念である。たとえば黄色の、一定の重さをもつ、展性があり、熔性がある、固形の物体としよう。ところが〔金の〕**実在的本質**は、金のこれらの性質ならびに他のいっさいの特性がもとづく、金という物体の感知できない諸部分の構造⁶⁾である」。

ロック自身の立場は、実在的本質に対して両義的である。なぜなら、われわれによつて知覚されるすべての名目的本質が依存する（と想定される）実在的本質は、物体の知覚不可能な微細構造だと考えられるからである。ロックは名目的本質とそれを支える実在的本質とを区別しなければならないと主張する一方で、たとえそうした微細構造があるとしても、われわれはそれについて何も知りえないとも述べている⁷⁾。当然のことながら、「経験主義者」としてはそう述べるほかないだろう。しかし後知恵ではあるが、ロックの言う「金という物体の感知できない諸部分の構造」とはその微細な原子構造を指しているたと解釈することはさほど奇妙ではあるまい。そして実際に、現代の多くの論者たちはそうした解釈を行っているように見える。

実在的本質は、知識の主体であるわれわれから独立して、あるものを特定の種に区分する内在的性質であるのに対し、名目的本質は、分類を行うわれわれの心の中の観念、ないしはそうした観念に依存する性質である。この二分法にもとづき、標準的な自然種理論は、あらゆる種を、実在的本質をもつ「実在種」(real kinds)と、名目的本質しかもたない「名目種」(nominal kinds)とに分割する。これより自然種は実在種であるのに対し、人工物種はたんなる名目種にすぎないという結論が得られることとなる。

2 生物学による提案——個体説

ロックによる実在的本質と名目的本質との区分を核とする標準的自然種理論が正しいとすれば、人工物種は実在的な種ではないことになる。だがこうした「不当な位置づけ」を与えられるのは、人工物種だけとは限らない。実のところ、長らく自然種の典型と見なされてきた生物種 (biological species) についてもその実在性に疑問符が付されてしまつた。

そうした疑念を払拭しようとする立場として、まずわれわれは「生物種は自然種ではない」と説く、種の個体説を検討す

ることにはしたい。この立場は、従来の自然種理論に変更を加えることなく、生物種を標準的理論のいわば「外」に位置づけることによって、「生物種の非実在性」という帰結を避けようとする。これに対し、次節で検討する「HPC説」は、同様の問題から出発しながらも、生物種の実在性を擁護するために、自然種理論そのものを改訂しようとする。だがいずれの立場も、標準的理論の枠内では扱いきれない人工物種を理論化する際に重要な示唆を与えてくれると思われる。

個体説の提唱者であるギゼリンとハルによれば、生物種は、標準的理論が言う自然種ではなく、ソクラテスや富士山と同様の個体・individual）ないし個別者・particular）である。⁽⁸⁾ こうした主張の根拠はどこにあるのだろうか。

第一に、生物種は標準的理論の本質主義的な枠組みにフィットしないという理由が挙げられる。前節で見たように、自然種は実在的本質、すなわちある対象を当該の種のメンバーたらしめる内在的性質によって特徴づけられる。このことは、自然種が、そのすべてのメンバー、かつそれらのメンバーのみがもつ性質（本質）によって定義されることを意味する。ところが生物種にそうした必要かつ十分な性質を見いだすことは困難である。たとえば、ヒトという生物種を考えてみよう。それが「二足歩行で理性をもつ」といった性質によって定義されえないことは明らかだろう。たとえ二足歩行しなくても、あるいは理性などもたずともヒトに属するメンバーはいるからである。こうした時代錯誤的な性質ではなく、DNAの構造等に訴えることによって、ヒト種を定義するのに必要かつ十分な性質を得ることができるかと反論する人がいるかもしれない。しかし残念ながら、ヒト個体には遺伝子レベルでの変異ないし多様性が広く認められており、それが物質の原子構造のような厳密さをもたないことはよく知られている。つまりヒト種はある特定のDNAの配列によって定義されるものではないのである。そしてこのことはすべての生物種に当てはまる。

「地球の定義」や「このガラスの中の透明な液体の定義」やといった言い回しが奇妙であることから分かるように、一般的に、個体（個別者）は定義される存在者ではない。（これに対し「惑星の定義」や「水の定義」は奇妙ではない。）個体説の支持者たちは、こうしたアナロジーから、生物種は種ではなくむしろ個体であると説く。

第二に、生物種は生成しかつ消滅するような何かであるという理由が挙げられる。言うまでもなく、これはすべての典型的な個体に当てはまる特徴である。富士山という個体はある時点で生成し、後のある時点で消滅する何かである。ソクラテスという個体についても同様である。ところで現在目にしてゐるすべての生物種は、種分化等によって、ある特定の時点で誕生したものである。また、現在に至るまで、実に多くの種が絶滅してきたし、今後もそうしたことが繰り返されるだろう。しかしながら標準的な自然種理論が理解する限りでの種は、それがクラスであれ普遍者であれ、生成・消滅するような何かではない。つまり生物種は、自然種よりも個体に近い特徴をもつのである。このことも彼らが「生物種は個体である」と主張する理由の一つである。

第三に、生物種は時空的連続性をもつという理由が挙げられる。個体に関して言えば、時空的連続性という特徴はごく当たり前のものに映るであろう。たとえば、ヒト個体（ソクラテス）はその生成から消滅まで連続して（絶え間なく）存在する。また、ソクラテスを構成する部分（四肢や臓器など）は、空間的な連続性（まとまり）をもつ。これらのことは生物種にも当てはまるだろう。なぜなら生物種は「生物個体たちの不断の、そして唯一の因果的シークエンス」だと考えられるからである。⁹生物種が系統樹の中に特定の位置をもつことは疑いえない。他方、生物種の空間的連続性はそれほど厳密なものではないが、それはアメリカ合衆国本土とアラスカ州が厳密な連続性をもたずとも一つの個体として理解されることを考えれば、許容の範囲内であろう。いずれにせよ、こうした個体との類似性が「生物種は個体である」という主張の一つの根拠になりうると個体説の支持者たちは確信している。

これらの他にも、「生物種は固有名によって指示される」や「生物種に関する法則は成り立たない」といった理由が挙げられる。前者の理由に関しては、（一般名ではなく）固有名によって指示されるものは個体であるという前提から、生物種もまた個体であるという結論が導かれる。後者の理由は、生物種にはつねに多様性と例外が認められることから、（物質種について成り立つような）厳密な法則性を生物種に求めることはできないと述べるものである。このことは生物種を、自然種

としてではなく、むしろ個体として捉えることを促す。なぜなら個体は生成・消滅する「歴史的存在者」であり、それに關する法則はないと考えられるからである。

以上で概観したように、生物種に関する個体説は、自然種のスタンダードから逸脱する生物種を、種ではなく個体として位置づけなおすことによつて、その実在性を確保しようする立場である。この試みは、自然種のスタンダードから外れる人工種を擁護するにあたつても示唆的であるように見える。実際、個体説の支持者たちが指摘する生物種の特徴のほとんどは人工物種にも当てはまると思われる。そうであれば、われわれは人工物種を種ではなく、個体として捉え直すべきなのか。

結論から言えば「否」である。たしかに個体説の洞察は、人工物種の実在論を構築するに際して多くのヒントを与えてくれる。しかしながら、種とそれに属する個体（インスタンス）という根本的な形而上学的區別を撤廃することのコストは大きいと言わざるをえない。また個体説には、物質種と生物種とのあいだに見いだすことのできる類似性を切り捨ててしまうという問題点もある。ゆえに個体説を人工物種に適用した場合、それを従来の自然種とはまったくの「別物」として扱わざるをえなくなるだろう。だが、生物学者たちは、何らかの種に属する少数のメンバーについての観察から、その種に属する（ほぼ）すべてのメンバーについて成り立つであろう主張を導き出す。つまり彼らはつねにこうした一般化を行つており、その際に生物種への言及は欠かすことのできないものとなっている。実際のところ生物種に関する一般化なしに生物学という科学は成り立ちえないだろう。程度の違いこそあれ、人工物種に関しても同様のことが言える。人工物についてあらゆる一般化あるいは理論を否定することはナンセンスである。

3 HPC説——新しい本質主義

主にポイドらの影響のもと、一九八〇年代の終わりから九〇年代の初頭にかけて、個体説とは異なる仕方では生物種の実在

性を擁護しようとする立場が現れる。「恒常的性質群の理論」(Homeostatic Property Cluster Theory: 略して「HPC説」と呼ばれる立場である。この立場が個体説と異なるのは、生物種を標準的な自然種理論の適用範囲の外に置くのではなく、むしろ生物種を中心に据えて自然種理論を組み立て直そうとする点である。

HPC説によれば、自然種とは恒常的にクラスター化された諸性質(homeostatically clustered properties)を備えた個体から成る種である。これを簡単に説明しよう。HPC説において、特定の自然種は、一つの本質的性質ではなく、諸性質の群(クラスター)によって他の自然種から区別される。従来の理論とは異なり、この性質群を構成する各性質は当該の自然種に属する個体に例外なく当てはまる(必要かつ十分な)性質である必要はない。次にHPC説は、そうした性質群の安定したまとまりを重視する。「ホメオスタシス」(homeostasis)の訳語である「恒常性」とは、こうした安定性を意味すると考えてほしい¹¹⁾。さらにHPC説は、この性質群の安定性に因果的に寄与する基底的メカニズム(underlying mechanisms)があると説く。HPC説によれば、自然種は、それに属する個体のうちに安定したまとまりをもって現れる性質群、およびそのまとまりを生じさせる基底的メカニズムによって「定義」される¹²⁾。これらは、従来の理論とは異なる意味で、自然種にとつての「本質」を成すと捉えられる。ただし注意しなければならないのは、恒常的性質群にせよ基底的メカニズムにせよ、それらが固定されている必要はないという点である。それらは時間とともに変化しうる「柔軟さ」をもつとされる。

自然種を「恒常的性質群」を用いて規定するということは、標準的理論の本質主義の要件を緩めるということを意味する。たとえばトラという種は、それに属するトラ個体に現れる恒常的性質群(肉食であるという性質、大きな爪をもつという性質、黄色地に黒の縞模様をもつという性質など)によって規定されるが、古典的な本質主義とは異なり、トラ個体がそれらの性質をすべてもつことは要求されない。稀にトラ個体の中には、全身が白いアルビノが存在するが、他の性質群がまったくて現れている限り、それはトラ種に属する。また、そうした性質群のまとまりに因果的に貢献する遺伝子情報(基底的メカニズム)に欠損があったとしても、ある程度の数の性質群が安定的に現れていれば、問題はないとされる。HPC説によれ

ば、生物種にとつて外部環境もまた基底的メカニズムの一つとなりうるが、そうした環境は、種の同一性に影響を与えない程度で、しばしば変化しうるものである。

当然ではあるが、物質種に関してこうした恒常的性質群を指摘することは容易であろう。たとえば、水という自然種に属するサンプルは、透明である、無臭である、一〇〇℃で沸騰するといった性質をもつが、それらは孤立して現れるのではなく、あるまとまりを成しており、たとえ外部の環境が変化したとしてもそのまとまりが容易に崩れることはない。ただし、生物種とは異なり、物質種における性質群のまとまりは厳格なものであり、また基底的メカニズム(分子から成る)が変化してしまえば、種の同一性はもはや維持されないだろう。だが、生物種を自然種の典型例とするHPC説は、こうした物質種をむしろ特殊な事例として捉える。

HPC説にもとづく新しい「自然種の一般理論」を提唱する植原亮は、自然種を次の三つの要件を満たす種として規定する。¹³⁾

- (1) 性質群の恒常性
- (2) 帰納的一般化の成立
- (3) 基底的メカニズム

(1) についてはすでに解説済みである。(2)で言われる「帰納的一般化の成立」とは、種を特徴づける恒常的性質群に含まれる各々の性質について、因果的説明と予測ができることを意味する。物質種に関しては、この帰納的一般化は厳密な「法則」というかたちで表現される。たとえば、水に関する帰納的一般化(法則)のおかげで、われわれはなぜこの水サンプルが沸騰しているのかを説明することができ、また適切な温度の下では凝固するだろうという予測を立てることができる。こうした帰納的一般化は生物種についても成立しうる。それは多くの例外を含むという意味で、厳密な法則ではないかもしれ

ない。しかしながら、古典的理論と異なり、この新しい自然種理論は、たとえ例外を含む一般化であっても、それがたんに偶然的に成立するのではない限り、物質種における一般化と根本的に異なるものではないと主張する。それらの違いは厳密さの度合いに関する違いにすぎないとされるのだ。

(3)についてもすでに簡単な解説を行ったが、もう一度確認しておこう。自然種には、その基礎となる一定の構造（メカニズム）が存在する。そうしたメカニズムはある自然種に特徴的な諸性質が安定したクラスターとなって現れることを説明する。諸科学の課題は、(1)の恒常的性質群の中から、その基底となるメカニズムを抽出することにあると言えよう。もちろん物質種の場合、基底のメカニズムは、その微細な構造（ロックの言う「実在的本質」）である。水がH₂Oという分子構造をもつことは、他の性質群の恒常性を説明する。だがHPC説に依拠する理論において特筆すべきは、基底のメカニズムをこうした微細な原子（分子）構造のみに限定しないという点である。植原によれば、基底のメカニズムは、各々の自然種に特徴的な恒常的性質群を出現させ、それと同時に、帰納的一般化を成立させることの基礎になるものであれば何でもよい。したがってそれには個体に内在する微細構造だけでなく、生物の置かれた特定の生態学的環境や歴史といった外的要因が含まれていてもよい。

以上、自然種を特徴づける三つの要件を見てきたが、植原の理論は、種に応じてこれらの要件が満たされる程度が異なること、そしてこれらの要件同士の結びつきの程度が異なることを容認する。前者に関してはすでに述べたので、後者に関してのみ解説しておけば、物質種において(3)のメカニズムは、(1)と(2)の要件と緊密に結びついている。しかし生物においてそれらの結びつきは物質種ほど緊密であるとは言えない。例を挙げると、同一の生物器官はしばしば異なるメカニズムによって実現される（これは「多形実現可能性」と呼ばれる）。たとえば人間の眼とタコの眼とでは、起源や構造のメカニズムが異なるが、それでもおおよそ類似する性質群を出現させ、ゆえに同じ眼という種に属するとされる。（鳥の翼とコウモリの翼に関しても同様のことが言える。）

植原の一般理論の眼目は、こうした程度の差を「理論的統一性」における差異と捉え、さらにそれを種の実在性の強弱として理解する点にある。すなわち、種は、理論的統一性の程度が高いほど、強い実在性をもつとされるのである。

HPC説およびそれにもとづく自然種の一般理論は、人工物種にも適用可能であるように見える。なぜなら、同一の種に属すると言われる人工物に関して（ある程度）恒常的な性質群を見つけることは困難ではなく、また多くの人工物種について（ある程度の）帰納的一般化も成立しうるからである。さらにそうした性質群の出現や一般化を支える基底的メカニズムを、個体に内在的な微細構造に限定しないのであれば、それを人工物種のうちに見いだすことは十分に可能であろう。（次節でそれを検討する。）実際、ポイドも植原も、人工物種を自然種の一つと見なし、自然種に関する統一的な理論の枠組みの中で分析できると考えている。

4 人工物種へのHPC説の適用をめぐる二つの立場…起源論的能説と認識実践説

HPC説の枠内で人工物種の実在性を擁護する立場は、私の知る限り、大きく二つに区分される。一つ目の立場は、ミリカンの「固有機能」(proper function) の概念を用いて、人工物に見られる恒常的性質群の基礎となる因果的メカニズムを説明するものである。これは主にエルダーと植原によって提唱されている¹⁴。彼らによれば、人工物種の基底的メカニズムは、この起源論的(etiological)に捉えられた機能¹⁵、およびそれが支える「複製プロセス」(copying process) に他ならない。この立場に立つ論者は、固有機能と複製プロセスに基礎づけられた人工物種がわれわれの心から独立していることを強調する。この点だけに限って言えば、標準的理論が唱えた種の実在性に関する第二の基準（心からの独立性）に依然として忠実であると言える。これに対し、二つ目の立場は、HPC説における自然種をわれわれの認識実践に依存する種と見なすことで、標準的理論の二元論を克服し、人工物種と自然種を統一的な枠組みで扱おうとする。これはレイドンが提唱する立場で

ある。¹⁵ 第一の立場が人工物種から徹底して「心への依存性」(mind-dependence)を排除しようとするのに対し、この第二の立場はHPC種が「心に依存」することを認め、それによって自然種と人工物種とのあいだの垣根を取り払おうとする。われわれの結論をあらかじめ述べておくと、これら二つの立場はいくつかの困難を抱えている。

まず一つ目の立場を「起源論的機能説」と名づけ、その概要を検討することにした。起源論的機能説は、人工物種を機能の歴史から規定しようとする立場であり、それを世界の因果構造の中に位置づけるという意味において、すぐれて「自然主義的」な理論でもある。

起源論的機能説によれば、多くの人工物種を含む「複製種」(copied kind)は次の三つの本質的性質によって特徴づけられる。¹⁶

- (I) 質的構造 (qualitative make-up)
- (II) 固有機能 (proper function)
- (III) 歴史的に固有の配置 (historically proper placement)

(I) は対象がもつ広い意味での「形態」(“shape”)を指す。人工物や生物の場合は文字通りの形態を、ダンスなどの場合は比喩的な意味での「かたち」を意味する。(エルダーによれば、「雨乞い踊り」といった行為ないし儀式も複製種の一つである。)(II)の固有機能とは「ある機能を発揮することが、その機能をもつようなシステムの存続に貢献し、結果として当の機能も存続することになるような機能」を指す。¹⁷ たとえば、現にあるドライバーの固有機能とは、ネジを回すことであるが、それは過去のドライバーがその機能を果たすことによつて存続してきた機能である。¹⁸ (III)に関してエルダーは次のように述べる。「複製種の現在のメンバーが因果的に依存する、過去のメンバーの働き (operation) は、それら過去のメンバーとともにあった他の特定の複製種のメンバーたちとの協働 (cooperation) である」。¹⁹ たとえばドライバーはネジを回してものを

固定する働きを果たしてきたが、そうした働きはドライバー単独ではなく、それが適切に形を整えられたネジと同じ環境にあることよってのみ果たされてきたと考えられる。こうした外部環境を「本質」の一部として数えあげる姿勢はHPC説と共通している。

人工物種（複製種）が「実在的」であると言われるのは、これらの本質的性質が、われわれの心から独立して、安定したまとまりを形成するからに他ならない。こうした恒常的性質群（上記の三つの本質的性質）を支える基底的メカニズムは、複製プロセスという概念によって説明される。複製プロセスとは「固有機能の発揮が原因の一部となつて人工物の複製がなされ、それゆえにこそ固有機能そのものも存続する、という過程」（植原前掲書、一二二頁）を指す。植原が指摘するように、それはたんにあるモデルのドライバーが工業的に繰り返し再生産される過程を指しているのではなく、「ネジを回すというまさにドライバーの固有機能が発揮される結果として複製がなされる過程」をいう（植原前掲書、同頁）。

こうした起源論的機能説による説明は、人工物を世界の因果的構造のうちに位置づけることを目指す一方で、徹底した仕方でわれわれの志向性と人工物との結びつきを否定しようとする。ここでもつばら懐疑の対象となるのは、人工物の制作における「制作者の意図（intention）」の役割である。

「創造は、職人が彼の為すことを意図することから始まるわけではない。むしろ、彼の制作物が受け継ぐであろう本質的諸性質は、機能と複製の歴史に由来するものであり、その歴史は職人が彼の仕事に着手するはるか以前に始まったものである」（Elder 2004: 142）。

植原もまた、エルダーに賛同し、次のような事例分析を行っている。

「日本刀の製作を例にとろう。刀工は、先人たちが残した既存の刀剣のデザインに準拠し、伝来の技法を頼りに鉄を鍛えるであろう。また

鉄の鑄造のためには玄翁やふいごや金床が必要だが、これらの固有機能も一定の複製の歴史に由来する。もちろん原料となる鉄そのものも、刀工の個人の意図に先行して存在するものだ。とりわけ日本刀の場合には、たたら吹きという独自の製法によって原料となる鋼を作り出すのが、この製法にも独自の歴史がある。「…」このように、既存のデザインや製作に必要な技法、使用に関する道具や設備に関する固有機能、そして素材に元来備わっている性質などは、職人個人の意図に先行して成立しているものである」（植原前掲書、一四一―一四二頁）。

エルダーと植原が人工物からその制作者の意図を完全に排除しようとするのは、自然種と人工物種との統一理論にとって「心からの独立性」という実在性の基準は欠かすことができないと考えるからである。

しかしながら、HPC説に対して起源論的機能説とは異なったアプローチをするのが、先に言及した第二の立場である。この立場を提唱するレイドンは、HPC説の真の意義は、それが自然種理論に「認識論的転回」(epistemological turn)をもたらしたことにある。²⁰レイドンはボイドらのアプローチについて次のように述べる。

「自然種の問題へのこのアプローチにおいて、認識論は形而上学よりも重要である。つまり、自然種を他の種類のもののグループングから分かつのは、種の本質と結びついているといった特定の形而上学的基準というよりは、むしろそれらもつ認識的役割 (epistemic roles) である」(Reydon 2014: 132)。

レイドンによれば、従来の自然種理論は、「必要かつ十分な内在的性質(本質)」や「心からの独立性」といった形而上学的基準を軸にして構築されてきたのに対し、HPC説はそうした形而上学的アプローチをとらず、自然種が果たす認識的役割、すなわちそれらが世界についてのわれわれの知識の中で果たす役割という観点から理論を再構築しようとした。そこで

重視されるのは「推論や説明といった人間の認識的実践において有用であること (being useful)」だとされる (Reydon 2014: 132)。われわれはレイドンによるHPC説の解釈を「認識・実践説」と呼ぶことにしたい。

興味深いことに、同じくHPC説に依拠するエルダーや植原らの起源論的機能説とは異なり、この認識実践説は躊躇することなく自然種の「心への依存性」を認めてしまう。この立場の眼目は、「自然種 vs. 人工物種」あるいは「心から独立した種 vs. 心に依存した種」という古典的な対立を解消し、自然種と人工物種を統一的な枠組みの中で扱おうとする点にある。

「HPC的な観点からは、自然種を必然的に心から独立したものと見なす必要はなく、それらを心に依存する人工物種から区別する必要もない。それどころか自然種も、それらが人間の認識的実践に決定的な仕方依存するがゆえに、心に依存するグループピングである」(Reydon 2014: 133)。

こうしたHPC説の捉え方は、自然種と人工物種を同じ土俵の上のせることを容易にする。そしてそれらの種の実在性は、われわれの認識実践（観察された現象に説明を与え、未来の事象を予測するなど）の中で果たす役割という観点から擁護される。程度の差こそあれ、人工物種もまた認識実践の中で一定の役割を果たすことは明らかである。われわれは人工的に作られた素材、たとえばプラスチックはなぜ水に溶けないのか、あるいはステンレスはなぜ錆びつきにくいのか説明することができ、それらのある状況の下での耐用年数などを予測することができる。また「機械」などに代表される技術的人工物種についてもそうした説明と予測がなされる。さらに、しばしば「道具」と呼ばれる素朴な人工物種についても、厳密さは欠くかもしれないが、ある程度の一般化は可能であるように見える。²¹⁾

むしろ認識実践説が強調する実践的契機は起源論的機能説の中でも重要視されている。とくに植原の一般理論において、「理論的統一性」が種の実在性を判定する基準となることはすでに述べた通りである。しかしながら、起源論的機能説は、自

然種の「認識実践への依存」「心への依存」というラディカルな主張に至ることは決してない。エルダーと植原によれば、自然種の恒常的性質群（本質）の「まとまり」はあくまでわれわれの認識活動から独立しており、それゆえにわれわれによる帰納的一般化を許す。また、そうした「まとまり」は複製プロセスという基底的メカニズムのおかげで生じるとされるが、すでに検討したように、この複製プロセスからは、意図や関心といった志向的要素が周到に排除されたことを思い出さねばならない。したがって、起源論的機能説と認識実践説は、同じHPC説にインスパイアされながらも、自然種についての根本的な考え方を異にするのである。

5 批判的考察

前節で検討した二つの立場は、ともにHPC説に依拠しつつ、自然種と人工物を統一的な枠組みの中で論じようとする理論である。しかし、両立場が互いに異なる自然種観を有していることは明らかである。以下でわれわれは、これら二つの立場が抱えるいくつかの困難を指摘することにした。これらの困難は、理論そのものに内在するものであるか、または自然種との統一理論に固執するあまり、人工物種の特性を適切に捉えきれないことに起因するものである。

起源論的機能説の第一の困難は、それが人工物の「新奇性」(novelty)をうまく説明できないことにある。²³これを解説しよう。人類の歴史において、われわれは過去には見られなかった新奇な(革新的な)機能をもつ人工物の創造に立ち会ってきた。たとえば一九一〇年代に商用化されたテレタイプ端末(印刷電信機)がそうである。それはタイプライターと電話の双方に似ているが、そのいずれでもない。当時テレタイプ端末はモールス信号とは異なる電信符号を用いてテキストを送受信できる革新的な機械であった。ところが起源論的機能説はこのテレタイプ端末が本来的機能(固有機能)をもつことを適切に説明することができない。なぜならその理論によれば、本来的機能とは「ある機能を發揮することが、その機能をもつ

ようなシステムの存続に貢献し、結果として当の機能も存続することになるような機能」だと規定されるからである（前節を参照）。つまり現在の個体が果たす本来的機能は、その祖先が当の機能を果たすことよって種の存続に貢献してきた機能である。しかし、そうした機能の捉え方が正しければ、テレタイプ端末といった新奇な人工物は、その祖先が存在しない以上、本来的機能を有さないことになる。ファーマースらの言葉を借りてこれを言い直してみよう。

「複製起源論 (reproduction etiological theories) がアイテムに帰属しうる本来的機能とは、それらの祖先たちの傾向性に対応する本来的機能のみである。創造的な技術者が革新的な人工物を設計するならば、定義上、対応する傾向性を備えた祖先は存在しない。したがって、複製因果論は、革新的な人工物に、いかなる本来的機能も帰属させない」（Vernas & Houkes 2003: 274）。

これより、起源論的機能説が人工物種についての理論であるのならば、新奇性についての説明を断念するか、または機能に関する別の説明を付け加えなければならないだろう。しかしいずれの方策をとるにせよ、理論の一般性に対するダメージとなるはずである。

起源論的機能説の第二の困難は、人工物を記述するにあたって一切の志向的チームが使用できない点にある。ここでの「志向的チーム」とは信念や意図や目的等に関する心的語彙を指す。この困難はとりわけ貨幣などの高度な人工物（制度的対象）を記述するときに明らかとなる。次のような問いを立ててみよう。いま私の財布には一枚の千円札が入っているが、ある形状をしたその紙片が千円札として、ないしは貨幣として存在するとはいかなることか。あるいは次のように問うてもよい。この紙片と、あなたの財布の中にある類似する紙片がともに「千円札」という種、「貨幣」という種に属するのはなぜか。これらの問いに答える際、その紙片がもつ内在的特徴（形態や材質や色など）に訴えることは十分ではなく、それについてのわれわれの共同的な信念や、中央銀行や政府への信用（承認）等に言及する必要があることは自明の理であるように思われ

る。なぜなら、そうした志向的作用がなければ、たとえそれらの紙片が一定の内在的特徴を備えていたとしても、それらは文字通りの「紙切れ」にすぎないからである。

もちろん千円札としての紙片はある機能（商品の交換を媒介する機能）をもち、それは「千円札」という種の本質の一部を成している。だが、この機能は起源論的機能説が説くような固有機能であるとは限らない。より正確に言えば、いま私が手にしている千円札の機能は、過去の千円札がそれを果たすことよって千円札種の存続に貢献してきたような機能（固有機能）によつて説明し尽くされるようなものではない。サールの用語を用いれば、それは「行為者機能」(agentive functions)と呼ばれるものの一つである。つまり千円札の機能は、われわれ行為者があるタイプの紙切れに外部から割り当てる機能であり、行為者の信念や意図にその存在を依存する機能である。別様に言えば、行為者機能は「志向性・相対的」(intentionality-relative)である²⁴⁾。この機能と対をなすのは「非行為者機能」(nonagentive functions)である。たとえば、心臓という器官は血液を循環させるという機能をもつが、その機能はわれわれによつて外部から付与されたものではなく、またわれわれの心の志向性にその存在を依存しないという意味において、非行為者機能に分類される。この区分が正当であれば、起源論的機能説の言う固有機能は明らかに非行為者機能の一種である。しかしながら、千円札（貨幣）の機能をたんなる非行為者機能によつて、あるいは純粹に非志向的なタームのみによつて説明することは困難であろう。（次節においても少し詳しく論じる。）

ここまででは起源論的機能説の困難について述べてきたが、以下では認識実践説の困難を一点だけ指摘しておこう。認識実践説は、HPC種としての自然種の実在性が、われわれの認識実践に相対的である、すなわち「自然種は心に依存する」と主張することで、人工物種と自然種を同一平面の上で論じようとする。われわれは、認識実践説が、起源論的機能説とは異なり、「人工物種の心への依存」を認めること自体はまったく正当だと考える。しかしながら、「自然種の心への依存」というテーゼに関しては、やや慎重にならざるをえない。なるほどボイドのHPC説や植原の一般理論には、このテーゼと親和性をもつ側面が垣間見られることはたしかである。だが、HPC説とそれにもとづく諸理論が「新しい本質主義」であり、

かつ「実在論」であるとされるのは、まさに自然種の（拡大された）本質的諸性質が、われわれの関心から独立した仕方・安定したまとまりを成すとされるからである。

もし認識実践説のテーゼが正しいとすれば、次のような問題が生じると思われる。まず、それはHPC説を実在論ではなく、たんなる規約主義（conventionalism）に近づけてしまう恐れがある。ところがほとんどのHPC説の支持者たちは、自然種が規約種（人間の取り決めによって画定される種）ではないと主張している。ただし、もっぱら認識実践説を「心からの独立性」を实在性の基準として認めない立場だと解すれば、たとえそれがHPC説の「正統な解釈」でなくとも、われわれはその立場に賛同することができる。

次に、——こちらの方がわれわれにとつて深刻な問題である——認識実践説のテーゼは、結果的に「人工物種の特異性」を消し去ってしまうことにつながる。このこと自体は、起源論的機能説の支持者たちも歓迎するだろう。なぜなら彼らは別の仕方、すなわち人工物種から「心への依存」を徹底的に排除することで、その特異性を消去しようと目論むからである。しかしながら、われわれは、自然種と人工物種とのあいだに存する溝を一挙に埋めてしまうことはいささか早計だと考える。というのも、そうしたやり方は、事象それ自体に忠実とは言い難く、明快な統一理論の構築を優先するあまり、人工物種（あるいは自然種）の本来のあり方を不当に歪めてしまうからである。

われわれのこうした見解は伝統的な二元論へのたんなる回帰にすぎないのではないかと疑う者もいるだろう。次節ではそうした懐疑に対して部分的に応答することにした。

6 志向説と起源論的機能説とのハイブリッドの可能性

「人工物種についての適切な理論」とは何か。これまでの論述からも明らかであるように、それは人工物種の実在性を擁護

できる理論でなければならない。もちろんそれだけでは十分ではない。われわれが望む理論は、少なくとも人工物の新奇性を説明することができ、なおかつ比較的高度な人工物まで扱いうるものでなければならない。さらに言えば、その理論には、人工物種の独自性を事象に即して記述することが望まれる。先に検討した二つの理論は、残念ながらこれらの要求を満たさない。したがって、それらはわれわれの望む「適切な理論」たりえていない。

少なくともここで掲げられたような要求を満たすのは、「人工物種に関する志向説」である。この立場は、人工物の制作者・設計者（発明者）・使用者たちの様々な志向的状态（欲求・信念・意図など）およびそれらの共有（集団的志向性）への人工物の存在依存を主張する。言い換えれば、それは人工物種が、われわれの志向的活動（intentional activities）と不可分の関係に立つことを説く立場である。この立場を採れば、新奇性に関する問題は難なく解決される。なぜかと言えば、「革新的な人工物はその設計者が意図した機能を付与される」という説明を与えることができるからである。その種の人工物には、当の機能を果たしてきた「祖先」をもたずとも、設計者が意図した本来の機能をもつことができる。なるほど人工物の中には、その設計者が最初に意図した機能を失い、新たな機能を得るものも存在するだろう。だが志向説は設計者（制作者）の意図だけを特権視する立場ではない。設計者の当初の意図から離れ、使用者が新たな機能を人工物に付与する事態はしばしば生じるものの、そうした事態は志向説の枠内でこそ適切に説明されうる。ついでに述べておくと、「意図された機能」(intended functions) という考え方自体は、ある種の人工物を適切に記述するうえで欠かすことができないと思われる。たとえば「魔除け」という人工物を例にとろう。それ（お面でもアクセサリーでも構わない）は本来「災いを遠ざける」という機能を果たすべく制作された。だが、それは「意図された機能」をおそらく一度も発揮することなく存続してきたと言えよう。その存続を支えてきたのは、むしろわれわれの（根拠なき）信念である。だが、起源論的機能説はこの種の人工物についてどのような記述を与えうるのか。実際に過去の魔除けが「災いを追い払う」という機能を発揮してきたことによって、魔除け種が存続してきたという説明は不可能であろう。その代わりに、起源論的機能説は「美的機能」のようなものに訴えて、魔除

け種の存続を説明するかもしれない。すなわち、それは人々の目を喜ばせる機能を果たしてきたからこそ再生産されてきた。しかしながら、そうした機能が魔除けの「本来的機能」であると主張することは奇妙である。志向説であれば、たとえ意図された機能が一度も実現されなかったとしても、それを魔除けの本来的機能として記述し、実際に魔除けが果たしている機能（「実際の機能」）と区別することができる。（「機能不全」(malfunction)の問題はこうした特異な事例も含むように思われる。）この例が示すように、ある種の人工物を適切に記述する際には、それを作り出した者たちの意図や彼らの複雑な信念体系に言及することは不可欠であると思われる。そうした記述ができるのは、起源論的機能説ではなく、志向説である²⁶。

志向説が、高度な人工物種の記述にも適切に対応できることは、上記の例からも明らかである。しかしながら、起源論的機能説の側にも、様々な工夫を施すことによって複雑な人工物種を説明しようとする試みがある。その一つが植原による貨幣の説明である。植原は「貨幣の改定」（新札の発行）について次のような見解を提示する。

「当局に貨幣の改定が可能であるのは、それを定める法律の力によるというよりは、むしろその法律に先立って、人々のふるまいの種が安定して存在しているおかげだといえる。したがって、貨幣が制度依存的存在であるというのは実際にはあまり正しい見方ではなく、貨幣をめぐる人間のさまざまなふるまいが種として持続しているということから、貨幣に関連する制度の成立が説明されねばならないのである」（植原前掲書、一六九頁）。

志向説において、貨幣の改定（たとえば旧一万円札から新一万円札への移行）は、新しい制度（法律）の承認といった集団的志向性によって説明されるだろう。そうした承認により、われわれは内在的特徴を異にする紙片（聖徳太子ではなく福沢諭吉の肖像が印字された紙片）に貨幣の機能を新たに割り当てるのである。志向説はこうした制度の変化をうまく説明してくる。しかしながら、貨幣の改定がそもそも可能であるのは、貨幣という制度的な人工物を支える安定したシステムが

あるからだという植原の見解も説得力をもつように見える。

一般的に、志向説は制度的人工物の生成やドラステックな変化を説明する際にその力を發揮する。他方、起源論的機能説は制度的人工物の比較的安定した持続を説明することに長けている。したがって、これらの理論の二者択一ではなく、互いの長所をハイブリッドするという選択肢があればそれに越したことはない。そのための鍵となるのが植原の言う「人々のふるまいの種の持続性ないし安定性」である。植原は人々のふるまいの種を制度的人工物種の基底的メカニズムだと考える。むしろ植原は、起源論的機能説に立つがゆえに、こうした「ふるまい」から一切の志向的要素を排除しようとする。しかしながら、「ふるまい」を植原のように捉える必要はまったくないばかりか、むしろそうした捉え方には無理があるように思われる。ここでの「ふるまい」は、心的過程を伴わない行動主義的なふるまいではなく、様々な志向的活動を営む人間のふるまいとして解されなければならない。さもなければ、それはよく訓練された犬が千円札を啜えて商店に行き、それを店主に渡して商品を持ち帰るという行動と何ら変わりはないことになるだろう。だが、われわれの貨幣をめぐる「ふるまい」はそのような行動とは区別されてしかるべきである。それは少なくとも、「私はその紙片が千円札であると信じていること」、「店主はその紙片が千円札であると信じていること」といった複雑な信念のネットワークのうちに形成されるふるまいである。

このようにふるまいを解するならば、起源論的機能説の中に志向説を組み込むこと、あるいは志向説の中に基底的メカニズムをはじめとするHPC説の道具立てを取り入れることは十分に可能であろう。これらの方策は人工物種についての「因果的アプローチ」と「志向的アプローチ」をうまく調停しようとする試みでもある。

とはいえ、前者の途をとるにせよ、後者の途をとるにせよ、種の实在性の基準として「心からの独立性」を根本的に見直す必要がある。この課題に関しては別の機会にあらためて検討することにしたい。さしあたりの見込みだけを述べておけば、「心への依存」は直ちに恣意性を含意するわけではないことを示す必要があるろう。すなわち「志向性による創造物」の中に

は、たんなる個人の空想の産物とは異なり、恣意のままに（好き勝手に）その諸性質を変えることのできないものが含まれること、またそうした創造物はわれわれにとって内在的であると同時にある種の「外在性」を有すること、さらにそれはわれわれを拘束する規範性の源泉の一つであること、これらを十分に説得的な仕方でも示さねばならないだろう。

註

(1) D. M. Armstrong, *Nominalism and Realism: Universals and Scientific Realism Vol. I*, Cambridge University Press, 1978; E. J. Lowe, *The Four-Category Ontology: A Metaphysical Foundation for Natural Science*, Oxford University Press, 2006.

(2) 著者は別の場所でもこの課題に取り組んでいる。鈴木生朗・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛『ワードマップ現代形而上学』、新曜社、二〇一四年のとくに第8章を参照。

(3) 本稿における「実在性」(reality) ないし「實在的」(real) という用語と「存在」(existence) という用語の使い方について一言述べておきたい。個々の人工物（個体）に関して言えば、「実在性」と「存在」はほぼ同義である。すなわちこの椅子が實在的であれば、この椅子は存在し、かつその逆も成り立つ。だが、これらの用語が人工物種に対して適用されるときにはやや事情が異なる。すなわち「ある人工物種が實在的である」と「それが存在する」とは区別される。大雑把に言えば、ある人工物種が實在的であるとは、それに属する人工物（個体）が存在する（實在的である）ことに他ならない。（実在性の基準に関しては本論の中で検討する。）ところが個々の人工物の存在（実在性）は、必ずしもそれが属する種の存在を含意するわけではない。「種が存在する」という主張は、それが自然種であれ人工物種であれ、「種を一つの存在論的カテゴリーとして認める」ことを意味する。しかしながら、「種は實在的である」という主張は、「普遍論争」といった存在論的議論とは無関係になされる。

ちなみに私自身は種への存在論的コミットメントは適切であり、かつ種は普遍者の一つであると考え、「形而上学的實在論者」であるが、それについての議論は他の場所で行った（倉田剛『現代存在論講義Ⅱ』、新曜社、二〇一六年刊行予定）。だが、さしあたり本稿の議論はそうした立場とは直接的な関係をもたない。ここでは種の「存在」ではなく、もっぱらその「実在性」が論

ごられると理解してほしい。

- (4) S. P. Schwartz, "Putnam on Artifacts" *The Philosophical Review*, Vol. 87, No. 4, 1978. この引用に続いてシユウォーツは次のように述べる。「これらの特徴は『鉛筆』という語に分析的に結びついたものであり、科学的探求によって明らかにされたものではない」(Schwartz 1978)。この件は、シユウォーツが自然種名の指示に関する「因果説」を認めるにもかかわらず、人工物種名に関しては「記述説」を採用することの根拠となる。ただし、クリプキとパトナムに端を発する「種名辞の意味論」を再考することは別の機会に譲ることにした。
- (5) ロック『人間知性論』第3巻第6章第15節、岩波文庫、一四六頁。
- (6) ロック前掲書、同頁。
- (7) ロックの両義性については、コーンプリスが次の著作の第2章の中で詳細な検討を行っている。H. Kornblith, *Inductive Inference and Its Natural Ground: An Essay in Naturalistic Epistemology*, The MIT Press, 1993, Ch. 2.
- (8) M. T. Ghiselin, "A Radical Solution to the Species Problem", *Systematic Zoology* 23, 1974: 536-44; D. Hull, "Are Species Really Individuals?", *Systematic Zoology* 25, 1976: 174-91.
- (9) M. Ereshefsky, *The Poverty of the Linnaean Hierarchy*, Cambridge University Press, 2001: 29
- (10) R. N. Boyd, "Realism, Anti-Foundationalism and the Enthusiasm for Natural Kinds", *Philosophical Studies* 61, 1991: 127-148など。
- (11) 一般的にホメオスタシスは、外部環境の変化に耐えて内部環境を一定の状態に保つ生物個体の特徴を指す。たとえば、われわれは寒さや暑さに耐えて体温を一定の状態に維持する特徴を備えている。
- (12) R. N. Boyd, "Homeostasis, Species, and Higher Taxa", in R. A. Wilson (ed.), *Species: New Interdisciplinary Essays*, MIT Press, 1999: 141-185. など(142-144)で詳細な規定がなされる。
- (13) 植原亮『実在論と知識の自然化——自然種の一般理論とその応用』、勁草書房、二〇一三年、第1章を参照。
- (14) C. Elder, *Real Natures and Familiar Objects*, MIT Press, 2004; C. Elder, "On the Place of Artifacts in Ontology", in E. Margolis & S. Laurence (eds.), *Creatations of the Mind: Theories of Artifacts and Their Representation*, Oxford University Press, 2007: 33-51. など(植原前掲書)。

- (15) T. A. C. Reydon, "Metaphysical and Epistemological Approaches to Developing a Theory of Artifact Kinds", in M. Franssen, P. Kroes, T. A. C. Reydon, P. E. Vermaas (eds.) *Artifact Kinds: Ontology and the Human-Made World*, Synthese Library 365, Springer, 2014: 125-144.
- (16) Elder 2004: 136ff; Elder 2007: 39.
- (17) 植原前掲書、一二二頁。
- (18) なぜドライバーにとって、ネジを回すことが「固有機能」だと言われるのか。ふつうは「制作者がそのように意図して作り出したから」だと答えたいくなるだろう。しかし起源論的機能説に立つ植原はそうした意図を排除し、次のように述べる。「かりにそのトークンに先行する同モデルのドライバーのトークンがねじを回すという固有機能を果たさなかったならば、それはいま存在しなかったであろう。なぜなら、そのような道具は無用であるがゆえに複製されなかったはずだからだ」(植原前掲書、一二二—一二三頁)。ほうした固有機能の捉え方は、人工物種の存続をあくまで因果的に説明することを目指すものである。
- (19) Elder 2004: 137.
- (20) Reydon 2014: 126.
- (21) ロウは人工物に関する論文の中で、エンジンや時計といった「機械」(machines)とテーブルやハンマーといった「道具」(utensils)とを区別し、前者のみが実在的な種を形成すると主張している。その主な理由は、機械が「工学的法則」(engineering laws)に従うのに対し、道具はそうした法則性をもたないからだとされる。興味深い指摘ではあるが、ロウ本人も自覚しているように、両者の線引きはそれほど容易ではな²と思われる。E. J. Lowe, "How Real are Artefacts and Artifact Kinds?", in M. Franssen, P. Kroes, T. A. C. Reydon, P. E. Vermaas (eds.) *Artifact Kinds: Ontology and the Human-Made World*, Synthese Library 365, Springer, 2014: 17-26.
- (22) この論点については主に次の論文を参照した。P. E. Vermaas and W. Houkes, "Ascribing Functions to Technical Artefacts: A Challenge to Etiological Accounts of Functions", *The British Journal for the Philosophy of Science*, Vol. 54, No. 2 (Jun. 2003), pp. 261-289.
- (23) J. Searle, *The Construction of Social Reality*, Free Press, 1995: 14-20. サールにおける制度的対象の理論については次の拙論の中で詳細な検討を行った。倉田剛「サールの社会存在論について」北海道哲学会「編」『哲学年報』60号、二〇一五年、三九一—六六頁
- (24) J. Searle, *Making the Social World*, Oxford University Press, 2010: 17.
- (25) 鈴木生朗・秋葉剛史・谷川卓・倉田剛「ワードマップ現代形而上学」新曜社、二〇一四年、第8章おまへA. Thomasson, *Friction*

and Metaphysics, Cambridge University Press, 1999)を参照。

- (26) 魔除けの例はトリッキーだという反論もあるだろう。しかしながら起源論的機能説を代表するエルダーは彼の言う「複製種」の一つとして雨乞い踊り (rain dance) を挙げている (cf. Elder 2004; Elder 2007)。エルダーはそれを「ミツバチのダンス」や「求愛のダンス」といったものと同様の分析を許すと考えているが、それにはいささか無理があると言わざるをえない。というのも、雨乞い踊りを自然選択された行動の種と同一視することは難しいからである。

*本稿では、日本科学哲学会第48回大会(二〇一五年一月二二日、首都大学東京)におけるワークショップ「人工物の哲学」のための提題発表「人工物の哲学——その見取り図と課題」の原稿(未公刊)が一部用いられている。

(人文科学研究院・准教授)